

1985年度春季研究発表会 ルポルタージュ

春季研究発表会の前日である5月14日は、おりしも西日本一帯が雨雲で覆われており、東京でも朝から雨がぱらついていた。心配していたのだが空路はたいしてひどい揺れもなく、福岡空港に着陸した時にはもう晴れ間が見えはじめていたので安心した。空港は市街に近い所にあり、市の中心部にはタクシーの利用で、約15分ほどで着くことができる。

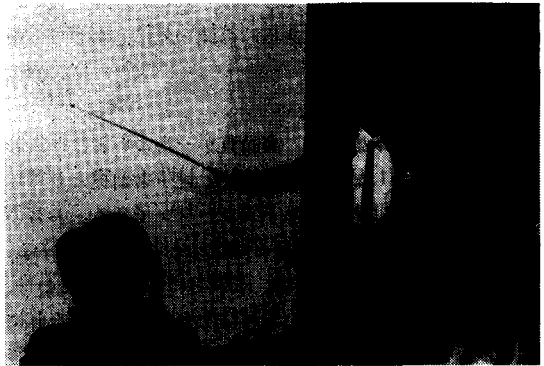
大会初日の5月15日(水)は前日とうって変わった良い天気にも恵まれた。午前9時に朝食を終え、学会誌で紹介されたホテルからタクシーで会場へ向かった。会場となった電気ビルは中央区渡辺通りに位置する大きな12階の建物である。研究発表会は、本館地下2階の会議室で行なわれた。エレベーターを降りるとすぐにロビーがあり、たっぷりの椅子が配置されていて、学会員相互の久しぶりの挨拶や団らんが交わされた。冷たい麦茶のサービスが大変にありがたかった。受付の前には発表題目を大きく掲載した一覧表が貼られ、ひと目でその日のスケジュールを知ることができ、実行委員会のご配慮に感服した。アブストラクト集を開いてみるまでもなく、会社関係から31件、大学から64件の研究発表が寄せられていることがわかった。また、17日に予定されている見学会も人気をあっめ、申込者があいついだ。

研究発表会

さて、16、17両日の研究発表会のなかから2～3印象に残ったものをひろってみよう。もとより全会場に同時に出席することはできないし、また見方も独断と偏見のそしりをまぬかれないかもしれないが、その点ご承知おきねがいたい。

1. 特別講演

特別講演の1番目は九州産業大学教授、黒田泰弘氏による「宇宙開発の現状と将来について」であった。黒田氏は、防衛庁、科学技術庁航空宇宙技術研究所、宇宙開発事業団等を経て現在九州産業大学教授をされているが、



刀根氏の発表

一貫してロケットの研究をされてこられた方であり、さらにスペースシャトル友の会という親睦団体の会長もつとめておられる。今回は、システムや信頼性の観点から考えると、宇宙ロケットの開発とORのあいだには深い関連があるので講演をお願いしたものだそうである。黒田氏は地球1周の距離を127cmのヒモで想像できる長さにとえ、人工衛星は地表から10cmの高さを飛んでいるとして説明されるなど、会場に宇宙をもち込んだ楽しい雰囲気でも講演がはじめられた。スライドを用いて、日本の宇宙開発の歴史が説明され、その間、通信衛星の失敗は2個とも、米国から購入したブラック・ボックスの故障が原因であったとのことである。今日では、日本もアメリカ、ソ連に続いて世界第3番目に菊2号を静止軌道に乗せており、米国の宇宙計画に、日本人の飛行士も参加することも予定されているなど。宇宙競争では決して遅れをとっていないということであり、日本は先端技術のこの分野でももっと努力する必要があると痛感した。

2番目は埼玉大学教授、刀根薫氏の「問題解決型手法AHPとその応用」であった。すでにご存知のとおり、AHPは、昨年来日したT.L.Saatyが、国際経済経営会議で紹介した手法である。刀根氏のユーモアあふれる説明に、聴衆は時間を忘れて聞き惚れていた。後の懇親

会で、OR学会会長の近藤次郎先生をして、刀根先生は大学教授としておくには惜しいと言わしめる名講演であった。埼玉大学大学院政策科学研究科では、すでにこの手法を講義にとり入れておられるとのことである。この手法は、筆者も少々使った経験があるが、結構使えるようだ。ぜひいちど使われることをおすすめしたい。

3番目は、西日本新聞社論説委員長中野学氏の「高度情報化社会について」であった。新聞記者としての高度情報、つまり裏話を聞かせていただくとともに、高度情報化社会に移行する過程での九州が直面するであろう問題点がわかりやすく解説された。

特に裏話は、なかなか興味深いものであったが、「ここだけの話ですが」という枕言葉がついていたので、ここでは書けないのが残念である。今後の問題点としては、政治、経済、文化の東京1点集中がますます進み、九州は過疎化するのではないかという懸念が述べられた。筆者はここで、最近日本語訳が出版された、R. L. エイコフの“The Art of Problem Solving”の中で、Reference Projection(参考投影)という概念が述べられていたことを思いだした。しかしかの悪い予測がたてられるが、そうならないためには、どのような政策をとればよいかを考えるのは、ORマンの仕事であり、今後、大いに活躍が期待される場であろう。

2. 一般発表

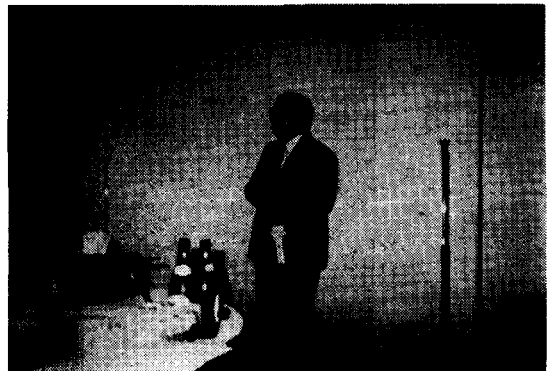
一般発表は、A～Eの5つの会場に分れて2日間行なわれた。特別テーマは、「情報システムとOR」ということで17件の発表があった。

(1) 特別テーマ、情報システムとOR

宇佐川雄士氏(中国電力)「簡易ソフトによる意思決定システム」意思決定システムという、つい大上段に構えたいくなるのだが、簡易ソフトで、ごく常識的な手法でも、運用の仕方ですべて立つということの実証である。その内容は多目的効用関数によって意思決定を支援するというものであった。適用事例の説明の後、会場からは使用したソフトの言語やリンクの状態についての質問があった。また特別講演でとりあげられたAHPによる意思決定手法使用の提案などが出された。

松井正一氏(電力中央研究所)「高度経済情報システムのパイロットモデル DEMANDS の開発」経済予測、経営戦略策定などのための経営情報分析が自由に行なえる意思決定支援システムについてであった。

鈴川陽一氏(宇部興産)「長期経営計画策定のためのシミュレーション」これは、相当複雑なモデルであり、そのために、入力データが多く、データ間の整合性と機能とのバランスを取るのがなかなかむずかしいところであ



懇親会 近藤会長

ろう。

大隈稔氏(新日鉄)「生産計画立案における物流逆転シミュレータの開発」問題のとらえ方にも発想の逆転がありがたいへんおもしろかった。

大西英行氏(住友金属)「鉄鋼業における情報システムおよびOR技術の活用」情報システムとOR技術はいわば車の両輪であり、ORは企業を運営していくうえで非常に重要であるということ、事例でもって示された。

藤元正二氏その他(福岡商工部)「コンピュータによる織物用デザイン処理システムの開発」あの有名な博多織のデザイン処理システムの開発について発表された。実物をまじえての話に、聴衆は熱心に聞き入っていた。ただ1つ残念だったのは、スライド係の練習不足からか、裏返しのスライドがどンドン出てきて、なかなか素早く訂正されなかったことであった。

松尾俊彦氏(西鉄)「バスロケーションシステム」渡辺通4丁目の右折信号をバスがきた時だけ5秒延長するだけで、バスが右折に要する時間が大幅に減少したというデータを示された。

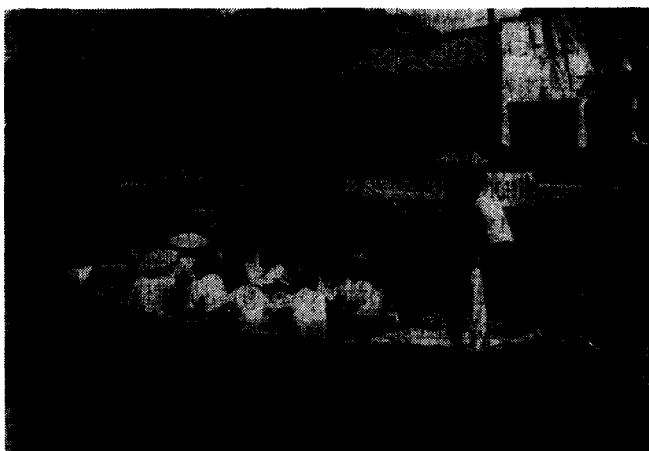
林徳一郎氏(西日本新聞社)「福岡市長選挙にみる予測調査」非常に良い予測をされていると感心した。もっとも、詳しい方法は企業秘密ということで、教えてもらえなかったのは残念であった。

(2) 他のテーマの一般発表

千田一成氏(竹中工務店)「問題構造把握手法 DEMATEL について」社内で、他のQCツールと同様に活用されるようになってきたと述べられた。筆者も、使える手法は、どんどん社内に広めなくてと決意を新たにした。

小野賢治氏(電力中央研究所)「夏季電力需要の気象要因分析」需要量の気温感応度は温度領域で異なるという興味深い結果を示された。

石堂一成氏(三菱重工)「構造物の最適設計」問題の対



象を大規模な鉄骨構造物にとり、重量の最小化を行なうさいに、局所的な最適化問題に分割して問題をとり扱うというものだった。

3. 全般的な感想

初日は理論的なものが多く、2日目は応用が多いようであった。毎回の学会発表におけるように“観客動員能力”は、応用研究のほうがあった。その理由としては、1つには、理論屋さんでも応用研究や事例研究から新しいテーマなり発想なりのヒントを探しているためであり、応用屋さんは、それをすぐ利用したいと思うためであろうと考えられる。

報告を聞いて気づいた点を2つほど述べたい。1つは、荒削りだがこれこそは革新的な新しい解法であるという気概をもった感じの報告がぐっと少なくなっているような気がする。2番目には、大学関係者の理論的研究を聞いていると、その研究が何かに応用することを念頭に置いてないと思われるものがあり、しかもそれが大学によっているように思えた点である。学風というものだろうか？必ずしも応用ばかりを意識する必要はないとは思いますが、やはり学問もいつかは社会に貢献する必要はあるわけだから、少なくともORの研究をする以上この意識をすてないでほしいものである。

見学会

5月17日には見学会が行なわれた。午前10時16分西鉄柳川駅に集合した約40名の参加者は4班に分かれ、駅近くの三柱神社入口にある川下り発船場から乗船、約1時間にわたって川下りを楽しんだ。当日は晴天にめぐまれ、菅笠をかぶっても、なおしのぎがたいくらいの暑さ

であったが、舟がすすんで旧柳川城をかこむ内堀にさしかかり、木蔭に入れば、その涼しさもまたひとしおであった。

低地に築かれた平城のため、防禦という主目的以外に灌漑、排水、交通という副次的目的をもって江戸時代に掘られたこの運河は今日でも立派に機能し、観光資源としてばかりでなく市民生活に深くとけ込んでいるようである。また、水門の開閉によって自在に水位を変化させる工事の妙は、当時の日本人が制約された技術のもとにあってもシステムの構想力を存分に発揮していたことを物語っており、現代のORワーカーにとっても興味深いものがあった。

沖端で下船したのはもうお昼近くで、ここから徒歩3分の所にある旧藩主の下屋敷「お花」で名物のうなぎのせいろ蒸の昼食をしたためた。昼食後は旧藩主立花家に伝わる歴史的記念品の見学、庭園の散策、またごく近くにある詩人北原白秋の生家を訪れるなど思い思いの時間を楽しんだ後、13時10分西鉄ご自慢の2階建バスに乗り、第2の目的地ブリヂストン・タイヤ鳥栖工場に向った。

鳥栖工場はわが国で最初にラジアルタイヤの大量生産に手をそめた工場であり、従来、多くの手作業にたよらなければならなかった、多段階にわたるタイヤの製作工程を、逐次機械化すると同時に、工場の情報システムを改善して中間在庫を減らす努力には注目すべき点があった。従来、多数の工員が立ちはたらいていたかつてのタイヤ工場を知るものにとっては、人の少なさにも近代化の印象を深くした。

(大村雄史、福馬敏子、今井良夫氏らのルポルタージュをとりまとめました)